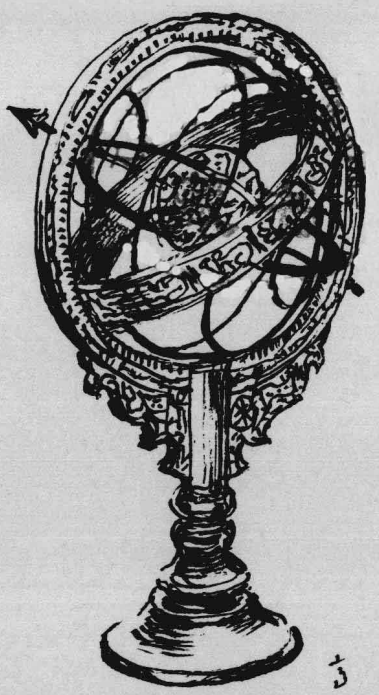
深代惇郎

旅立つ

柴田俊治

深代惇郎
柴田俊治
旅立つ



ダイヤモンド社

旅立つ

昭和56年11月19日　初版発行　　定価 1200円

著　者　深代惇郎
　　柴田俊治

©1981 Fukashiro & Shibata

発行所　ダイヤモンド社
郵便番号　100
東京都千代田区霞が関 1-4-2
編集　電話 東京(504)6403
販売　電話 東京(504)6517
振替口座 東京 9-25976

編集担当／花田茂明
落丁・乱丁本はお取替えいたします

加藤文明社印刷・誠光社製本
1010-615750-4405

もくじ

1

広場——パリ 4
踊るよ——アヴィニョン 8
草々——マルセイユ 11
くまなき——ジュネーブ 14
物見台——ベルリン 18
松の小枝——ウィーン 21
泉——ローマ 25
いとなみ——ナポリ 29
青の青——マルタ 32
かけらたち——アテネ 37
灯——オスロ 40
王さまの耳——コペンハーゲン 43
肌——ヘルシンキ 47

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

行列——モスクワ 50
？——ベオグラード 53
雪と党——ブカレスト 56
光——アルジェ 59
悠々——カイロ 62
三つの神——イェルサレム 66
坂——テヘラン 69
とほう——ニューデリー 72

2

塔——ラングーン 76
流れ——バンコク 80
水百合——ユエ 83
覗く——香港 87
人も土も——西安 91

ねぎ——北京 94
馬上杯——慶州 98

3

ねむ気——ホノルル 102
湾——サンフランシスコ 106
天使——ロサンゼルス 109
共和国——ヒューストン 112
ブルース——ニューオーリンズ 116

4

北——ミルウォーキー 120
やさしい——シカゴ 124
底力——デトロイト 127
オレンジ——マイアミ 130

さくら——ワシントン 133
父——フィラデルフィア 137
何でも——ニューヨーク 140
自由——ボストン 144
すかすか——モントリオール 147
贈り物——リオデジャネイロ 150
沖——悪魔島 153
まぼろし——マラケシュ 156
紅い花——セヴィリヤ 159
煙突——ダブリン 163
がんこ——エディンバラ 166
凹む——ロンドン 169

5

海峡の雲——イスタンブール 174

夢——斑鳩(いかるが)　183
6　川岸で　186
あとがき　225

装丁・イラスト　高塚省吾

旅立つ

青い光に旅立つ。未知の土地はなにを語っているのか。
身を乗りだし、耳を傾け、眉まで寄せて聴こうとするのだが、その言葉ははっきりつかまえられない。
風が吹き、光の中に、ひとり、さらされる。手に握っていたはずのものは、すべて捩ぎとられ、自分の弱さ、貧しさがありありと透けて見える。
だが、不安の夜をくぐれば、朝には慄えるような喜びがある。未知は、また、ひろがっていても、声がかすかに聴こえるような気がする。語れ。耳を澄ましているから。
飛んできた言葉を、心の手帖に書きとめ、振り返り、行き過ぎる。
果てない空の下、私は変わったか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

1

広場 ――――パリ

だれにも、ふたつの故郷がある。ひとつは自分の生まれ故郷、もうひとつは、世界のこころの故郷、パリ……。

フランス人たちは、しゃれのめして、しかし、いかにも得意げに、このことばを好んで使う。ちょっと、しゃくにさわる。なにを、この思いあがりめが、とも思う。

が、そういわれてみて、いちがいに否定しきれないものが、われわれの胸の底にのこる。世界のこころの故郷というのは、言葉のあやだとしても、われわれのひとりひとりがパリになんとないあこがれを抱いているのは確かだ。なぜだろう。シャンソンに切なく歌われるからか、毎年のニューモードの発祥地だからか、それともかずかずの文学、美術、歴史物語を生んだ都市だからだろうか？　おそら

く、だれかにとってはそうであり、だれかにとってはそうではない。

セーヌの岸にそって散歩してみよう。たいていの日には、パリ特有のうす曇りの空に、エッフェル塔がかすんでいるだろう。春ならマロニエの青葉が風に鳴り、秋なら枯葉と落ちた実が、足もとでかさこそ音を立てるだろう。そういった風景がいいことも間違いはない。しかし、それ以上にわれわれの心を満たすのは、ここでは人間が解放されているという実感である。

恋人たちが腕を組んでいても、抱擁していても、じろじろ見るものはない。どんな人種、職業のひとも、みんなムッシュー、マダムと呼ばれる。貧しいから、金持ちだからといって、とくに軽蔑されも、尊敬されもしない。コンコルド広場までくると、「人間はみな平等」という精神が、ここで花開いたことが想い出される。

この広場は、ギロチンの記憶とも結びつく。幾十万の生命に血ぬられた大革命は、近代史の夜明けであったと同時に、おびただしいあやまちと愚行の連続でもあったのだ。

この国では、明るいところも暗いところも隠さない。人間は、精いっぱい生きるのがいいのだ。ただし、他人に迷惑をかけないよう適当な節度を自分でみつけなさい——パリは、街ぜんたいでそういっているような気がする。

現代都市としては、ニューヨークの方がうんと立派だ。歴史記念物なら、ローマにもごまんとある。買物をしたければ、むしろ東京の方がいろいろな物が安くある。が、それらを超えて、パリにしかないもの。それは、隠さず、とらわれず、こだわらない人間像だろう。

パリで、われわれは人間に触れる。そして、自分に触れる。

踊るよ ――――アヴィニョン

ミディ――正午。そのとき太陽の位置する方角、つまり南。そして、南フランス、プロヴァンス地方。このことばが呼びおこす花やいだ、心ときめく響きは、パリの陰鬱なひと冬のあと体感される。

ローヌ渓谷にそって、ミディは北から下って行く地である。ここで、人々は北ヨーロッパの雲と別れ、地中海の青空を見る。

ミディの核をなす都市はどこか。大口論をしても決まるまい。だが、アヴィニョンがその一つであることは確かだ。

アヴィニョンの栄光は、十四世紀、法王がこの地に居を定めたところから発する。七代の法王が建築をつづけ、内装をこらした法王宮殿は、中世ゴチック建築の粋とされる。法王宮殿なくしてアヴィニョンはない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c